



自然栽培パーティのち

高原直泰選手は、 沖縄で百姓になった

サッカー日本代表として活躍した高原直泰選手は、昨年暮れ、沖縄に移住してサッカーチームを立ち上げた。自然栽培パーティのメンバーのフルタイムからはいま、コラボで、農業にも取り組むという。何があったのか、どうなるのか、聞きまわりたい。

県リーグのグラウンドで
ジュビロ磐田を思い出す

五月一日(日)朝八時過ぎ、沖縄うるま市具志川総合グラウンドは、芝生が強い陽さしで波打っていた。沖縄県3部リーグの初戦がはじまる九時には、気温は三〇度に迫っているのではないか。その初戦は、沖縄S.Vのサッカー界デビュー戦となる。グラウンドでアップがスタートした。ベンチ横を見ると、黒い審判服に着替える人の背中が、心なしか緊張しているようだった。興味をそそられて話しかけると、初戦の副審だった。アマチュアの試合には専門の審判は派遣されない。彼は、審判を終えたら、自分の試合に臨む。高原さんの試合の審判ができるって、記念になりますね、という、「いやあ、ボク、高原さんがいたころのジュビロの大ファンだったんです」とうれしそうに言った。高原さんが入団した一九九八年、ジュビロ磐田はJ1リーグ1stステージで優勝。2ndステージは二位。黄金時代を迎えていた。ブラジル代表のダウンガ

が司令塔としてにらみを利かせ、中山雅史が走り回って得点王・MVPに輝いた。いまは、ジュビロ磐田の監督として返り咲いた名波浩が中盤を華麗に仕切っていた。

元日本代表のスター選手のプレイにファールを取れば、すごい勳章じゃないですか、と軽口をたたくと、「とんでもない、このド素人という目でにらまれたら、と思うと、足がすくみます」。そうだろうな。高原さんの翌年にジュビロに入団して、不動の中盤として活躍した西紀寛選手も、いま、目の前でアップしている。ずっと東京ヴェルディFWの星だった飯尾一慶選手、J1リーグで西選手と同時代に勇名をとどろかせた森勇介選手も、先発メンバーに名を連ねている。これだけのJの強者を、県3部リーグの選手が、審判として仕切るのは荷が重かるう。

「このままで、J2にも行けるよ」「J1でもやれそうね」とスタンド席の会話も、ホルテージが上がってきた。



編集部=文
text by KOTONONE
岸本 剛=写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto